

言語指導の基礎 (一)

——ことばの発達をささえるもの——



村 石 昭 三

幼児が各年令の発達段階に応じたことばの力を身につけるためには、幼児個人の心とからだだが十分に成熟・発達していなければならぬ。心とからだの成熟・発達はことばの発達をささえる主要な条件である。しかし、それだけでは十分とはいえない。ことばは心とからだが発達してささいれば、自発的に伸びていくというよりも、幼児はより多く環境の影響を受け、その環境にたいして生きて働くことばの力を決めて経験する。したがって、望ましい環境が与えられていることが必要である。

幼児個人の心とからだの成熟・発達を、ことばの発達をささえる個人的条件とよび、これは環境的条件にたいする。教師の指導法のよしあしは一応、環境的条件の中に入れておくが、あらためてとりだす必要があると思われる。

一、個人的条件

ことばの発達の個人的条件とは、幼児個人の心とからだの成熟・発達をさす。つまり、知能・身体・運動能力の発達、社会性および情緒性の発達である。このうち、とくに知能、社会性および情緒性の発達はことばの発達と相関が高いものである。相関が高いということは、相手の発達を助けるということもあるし、また逆に、こちらの発達が助けられるという意味もある。

(1) 知能の発達

精神年令とことばの発達とは平行するものである。いろいろな研究結果からみて、ことばが発達することと、知能が高いことは密接な関係があることを認めることができる。知能のすぐれている幼

児は、知能の劣った幼児よりも早くことばを使いはじめ。知能がとくにすぐれている幼児は話すことばの抑揚も正しく、長い正しい文で話す傾向がある。しかし、ことばの発達が遅れているからといって、必ずしも知能が劣っているとはいえないようである。

また、知能は幼児のことばの発達の中でも、ことばを使ったリ、表現したりする能力とは相関が高いけれども、ことばの意味を理解する能力とは関係がないといわれている。

この点、小学校に入ると逆になって、知能の高い子は聞く・読むという理解する能力や語彙理解力が高く、話すこととは関係があまりなくなっている。おもしろいちがった傾向である。

(2) 身体・運動能力の成熟

からだが大いか、小さいかということは、極端に未成熟な場合をのぞいてはことばの発達と相関がない。視覚・聴覚などの言語器官に欠陥があると、ことばの発達がおくれる。病氣も一時的なものはないして問題にならないが、長つづきしたり、頻発したりすると、その時期における大事な学習経験を逸し、また学習に気のりうすくなって、ことばの発達がおくれる。つまり、からだの成熟は、ことばの学習を十分にできるだけの準備ができていればよいという程度の問題である。

繊細な運動技能の発達は、発音能力を助け、物を取り扱う能力は、物について話をする能力の発達を助ける。

(3) 社会性・情緒性の発達

社会性の発達がおくれている幼児は自己中心的なことばが多く、グループで話しあうことがうまくできない。社会性の発達がことばを伸ばすとともに、ことばの発達が社会性を伸ばす。

母親から愛情を拒否され、情緒に安定を欠いた幼児は、とかく言語障害をおこしがちである。吃音などは両親の抑圧がきびしすぎたおきた情緒不安定や、一時的な強い衝撃の結果として現われることが多い。また、過度に甘やかされ、保護されてきた末っ子などには、幼児語や幼児音がおそくまで残るものである。

(4) 男女の性

一般に、女の子は男の子よりことばの発達がすすんでいるといわれる。幼児が自由会話をしているときに使った異なった語の数を調べた調査によると、だいたい女の子の方が修得語数が多いとでている。これは心とからだの成熟・発達が女の子の方が早熟であることと、幼児期の生活習慣からみて、女の子は母親とことばで通じあう機会が多いためである。また、絵本に早く親しむということもあつて、読書する興味や文字の生活などにも、女の子は男の子よりも早くとけこめることができるが、それはやはり、生活の型とか、興味の方向のせいであろう。

しかし、女の子の方がことばの発達のすべてにわたってすぐれているとは一概に言えない。たしかに、使われる語数とか、文の長さ

という点では女の子がすぐれているが、命令文が多く、自己中心的なことを多く使うようである。女の子にくらべて、男の子はより客観的、社会的であって、ことばを使って社会生活にいつそうよく適応しているといわれる。してみれば、ことばの形式的な点では、女の子がすぐれ、ことばを生活に役だてる、ことばで考えるという点からみれば、男の子がまさることになる。

男の子と女の子とは、どちらがまさるか、ということよりも、むしろ、それぞれがどんなことばの発達の状態を示すか、というように考えることがよいかもしれない。

二、環境的条件

環境的条件とは、幼児のことばの発達に影響を与える、発達のささおとなるかぎりでの学習環境であって、家庭環境、幼稚園環境、社会環境などにわけることができる。それらの環境の中で幼児は生活して、いろいろなことばの経験をし、ことばの学習をおこなっている。

(1) 家庭環境

両親の社会的地位ならびに経済状態と、ことばの発達との間にはかなりの相関がある。上流階級の幼児より下層階級の幼児の方が、ことばの発達がおくれていることは、いろいろな調査からでていゝる。また、年齢が進むにつれて、職業間の差がいちじるしく現われ

る。

大きな調査では愛育研究所で三才から六才までの幼児に語彙テストをしたものがある。親の職業別によって、幼児をわけ、語彙テストをすると、ことばの使用力にも、また理解力にも差がでてくる。

このように、幼児の家庭環境を両親の社会・経済状態や、また職業によって分けると、その間にことばの発達に差がでてくるのは、両親の知能のよしあしが、直接に幼児の知能に遺伝するためということもあるが、より多く家庭での学習環境によしあしがでてくることに注意したい。

たとえば、よく旅行にでる機会があると、幼児は直接経験を豊かにもつことができる。テレビやラジオ、絵本などの文化条件がそろっていて間接経験ができる。両親が教育に関心をもち、幼児と話しあい、またおもしろいお話を聞かせて、よいパーソナリティを育てやる。このような機会が、社会・経済状態のよい家庭や知的な職業をもつ家庭の幼児には恵まれているためである。

近ごろでは、両親の社会・経済状態よりも文化的条件、文化的条件よりも家庭の対人関係のよいことの方が大事だということがわかってきた。対人関係のよいことは幼児の情緒性の安定と結びつくこととがらである。環境とはこのように、幼児に生きて働く力を与えるものであって、単なる物としての環境ではない。その意味で、家庭のしつけということも見逃すことができない。幼児は母親を通して

より多くことばを学ぶものである。しかし、過度のしつけや母親の神経質は発音欠陥児をつくるという報告もある。

ことばを通じあう機会に恵まれていれば、それだけことばの力は伸びるが、いずれかといえば、幼児同志よりもおとなとの通じあいの方が効果的である。ひとりっ子、とくに女のひとりっ子はことばの発達が早熟であるといわれるのは、他の幼児が仲間と遊びに熱中する間に、おとなと話しあうことが多いことが一つの理由である。

(2) 幼稚園環境

幼稚園環境には、幼稚園の経営（園の大きさ、施設、設備）教師（資質、研究活動および指導技術）の条件がある。そして幼児のことばの発達に与える働きかけかたは家庭環境の項でみた場合とかなり共通したものがあるが、とくに教師の指導技術なり、パーソナリティが問題になる。家庭の母親は個性をよく知ったひとりのわが子を教えればすむが、教師は多勢の幼児を同じ学級の中で指導しなければならぬから、幼児ひとりひとりの個人差に応じた必要な指導法を考えてあげなければならない。

子ども好きと、そうでない教師、公平な教師と不公平な教師とでは、幼児に与える影響がちがう。情緒的に落ちつきのない教師の教える幼児に、精神的に健全なものが多いという報告がある。

(3) 社会環境

幼児の経験する生活空間が広がるにつれて、それだけ社会環境の

力がことばの発達に影響を与える。とくに現代はマス・コミュニケーションが発達するにつれて、その力は、家庭のしつけを越え、教師の指導をつき破って、幼児のことばと思想の世界を支配している。

しかし、ともかく、地域社会は幼児のことばの学習に生きて働く生活・文化的な望ましい条件にあることが必要である。文化条件のわるいなかの幼児はことばの発達がおくれ、閉鎖的な因習にとんだ土地柄に住む幼児はいつしかそうした地域パーソナリティを身につける。方言色の強い地域の幼児は、方言を身につける。

幼児のことばの発達に幼稚園差ができるのは、このような幼稚園環境、社会環境の条件の影響を受けることが多いためである。

以上のように、ことばの発達をささえる個人的条件はことばの経験を受けとめる側の条件であり、環境的条件は経験を与える側の条件である。そしてそのささえたの比重は四分・六分の割合で、環境的条件の方が大きいとみる。しかし、小学校に入れば、その関係は逆になり、個人的条件の方に重みがかかってくる。それは子どもが単に経験を受けとめる受容・模倣的な学習の段階から、積極的に経験に働きかける、経験を再構成する学習のしかたと変るからである。

したがって、つぎはことばの学習——理解、抽象という問題とありあげなければならない。